

☆Live Bar雷神Presents : ばぐーす長谷川のロック向上委員会☆

『第9回：溺愛偏愛音世界』

～ばぐーす偏愛セレクション11～

今回は、地域性もジャンルも歴史も何も関係なく、私ばぐーすが溺愛・偏愛する素敵な音楽をご紹介します。

「おっ、こんなん好きなんか!？」とか

「ああ、やっぱこの時代なんねー」とか

今回はあまり勉強にはなりません(笑)。ただ楽しんでください。良い曲ばかりですから。

※なんだかんだで、ほぼロックです

■どれだけ口ずさんだことか..の巻

1: Kim Carnes / Bette Davis Eyes (Mistaken Identity : 1981)



クールなハスキー・ヴォイスで世界を魅了したKim Carnesの6th作。1972年ソロ活動開始。他シンガーからカバーされるなど良質な曲を書くSSWとして活躍したが、セールスの苦戦が続いた。しかし、1980年に入りKenny Rogersとのデュエット曲：Don't Fall In Love With A Dreamerでヒットを記録。翌年リリースのこの作品では、フォーク、カントリーのルーツを脱ぎ去ったアプローチにて大成功を収めることとなる

<https://www.youtube.com/watch?v=EPOIS5taqA8>

2: The Kinks / Sweet Lady Genevieve (Preservation Act 1 : 1973)



リーダー：Ray Daviesが病的なまでにロック・オペラを貫いた時期の作品。演劇と音楽の融合を追求してきたRay Daviesの頑固で真面目な性格が聴き取れる。この後、さらにロック・オペラ愛が加速し、メンバーのみならずファンからも不満が続出。その狂った時期のスタートとなったバンドの過渡期に当たる作品だ。この頃はバンドと言うより一座であり、総勢13名ものメンバーが在籍していた。

<https://www.youtube.com/watch?v=s-YSCU0sY3c>

■つうか群を抜いてます

3: Bob Dylan / Joey (Desire : 1976)



Bob Dylanの17th作。ビルボード1位/UK3位を記録しており、Dylan作の中でも最も売れた1枚。Dylanファンではないロック・ファンが好む作品としても有名である。Scarlet Riveraのヴァイオリン、そしてEmmylou Harrisの声もDylanの音楽にももの凄くマッチしている。陰湿であり陽気であり国籍不明、しかしDylanらしさを失わない最強の作品と言えるだろう。

<https://www.youtube.com/watch?v=GITpor5E5Fo>

4: Jeff Beck Group / Situation (Rough And Ready : 1971)



第二期JBGの1st作。R&B、Funk、Soul、Jazzという様々な要素をJeff Beck流にまとめあげた名作。アルバム・タイトルの通り「ラフ」な面も多々あるが、一般的に評価の高い次作よりも粘っこいロックが展開されているおりエキサイティングである。ブルース・ロックに焦点を当てていたベックが、違う方向性へと舵を切った初期の作品という意味でも重要なアルバムだ

https://www.youtube.com/watch?v=031Quer1N2A&list=RD031Quer1N2A&start_radio=1

■女王と呼んでイイですか

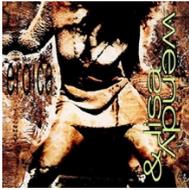
5: Stevie Nicks / Edge Of Seventeen (Bella Donna : 1981)



妖精Stevie Nicks絶頂期となるSolo 1st作。Fleetwood Mac (以下FM)と並行しての活動となるが、あれだけの名曲をFMで提供しつつも、Soloでも良曲/名曲を生み出していた最強の時期。そして、彼女に寄り添いほぼ全曲でバックアップしているWaddy Wachtelの才能も聴き逃さない。全曲捨て曲無しの素晴らしいアルバム。

<https://www.youtube.com/watch?v=UmPgMc3R8zg>

6: Wendy & Lisa / Strung Out (Eroica : 1990)



Prince & The RevolutionのWendy MelvoinとLisa Colemanのユニット3rd作。The Revolution時代のサウンドに最も近い1st、Funk Rockのカラーを打ち出した2nd、そしてそれらをまとめバランス的に向上させたこの3rdと、素晴らしい作品ばかり。60年代的サイケなファンクを現代にバージョンアップさせた、カラフルなポップ・ミュージックの魔法が聴ける。

<https://www.youtube.com/watch?v=Ux1qov10kEQ>

■いつも頭に浮かぶメロディ日英混合編

7: Psychedelix / Move On (Psychedelix : 1992)



Charが英国のリズム隊(Jim Copley & Jaz Lochrie)と結成したバンド。長年活動していたバンド：Pink Cloud (Johnny, Louis & Char)から離れ、世界に通用する音楽を作るということに目標をおいたPsychedelixの1st作。サウンド、楽曲、アレンジ共に、90年代の新たな音楽スタイルを生み出そうとする姿勢が存分に表れた名盤。

<https://www.youtube.com/watch?v=Z17Jf6KdZtw>

■いつも頭に浮かぶメロディ日米混合編

8: Cibo Matto / Sunday Part II (Stereo☆Type A : 1999)



今聴いても古くなく、万人の聴覚に訴えるパワーを持った日本人/本田ゆか&羽鳥美保のユニット：Cibo Mattoの2nd作。音楽性もスタイルも自由で幅広く、それを自在に操る能力の凄さがここにある。アレンジ、歌詞、曲順、どこを取っても中途半端さを微塵も感じさせないアーティスト的な作品と言えるだろう。前作はデュオ+ゲストミュージシャンとなっていたが、この作品はバンド・スタイルになっており、Sean Lennonがメンバーとして参加している。

<https://www.youtube.com/watch?v=rB15l0ueais>

■この凄さ一生モノ

9: Grateful Dead / Terrapin Station (Terrapin Station : 1977)



シスコ3大ロック・バンドの1つ：Grateful Deadの14th作。アリスタ・レコード移籍第一弾作であり、ここで初めて外部プロデューサーを起用している。いつもながらの自由度の高い演奏を上手くまとめ上げたバランス感覚、パンク/ニュー・ウェイブ全盛期に敢えて大作に挑戦するアンチ振り、そしてそれらの楽曲の質の高さに驚愕。これぞ名盤と言える1枚。

<https://www.youtube.com/watch?v=e01zTf2tLV0>

10: Pink Floyd / Comfortably Numb (The Wall : 1979)



Roger Watersがイニシアティブを取って制作された名盤。これよりも前の作品とは違う感触のロックオペラ作である。退屈な曲も混在しているが、それらも含め壮大なロック絵巻となって耳に飛び込んでくるのが凄い。David GilmourのGuitarはこれまでの名作よりさらにメロディアスで、抜群のソロを聴かせてくれる。

<https://www.youtube.com/watch?v=x-xTttimcNk>

11: Joni Mitchell / Off Night Backstreet (Don Juan's Reckless Daughter : 1977)



Joni Mitchellの世界観が最高な形で表れた9th作。まるで宇宙に居るかのような音世界が繰り広げられている。Jaco Pastoriusが全曲に参加しており、様々な技巧・アイデアを駆使してJoniの音楽を彩った最高傑作だ。音楽への真摯な姿勢が全編通して存在する高貴な1枚。

<https://www.youtube.com/watch?v=Ewo2nXIGtiQ>